

高齢男性へのエンパワメント支援に関する事例研究 —介護予防デイサービス利用による社会的交流からの考察—

山本 大輔 京都府立大学大学院

キーワード 高齢男性、介護予防、エンパワメント、仲介

I | はじめに

近年、介護予防に関する取り組みとして、高齢者を対象としたサロン活動や体操教室などが各地でおこなわれている。介護予防とは厚生労働省によると「要介護状態の発生をできる限り防ぐ(遅らせる)こと、そして要介護状態にあってもその悪化をできる限り防ぐこと、さらには軽減を目指すこと」(厚生労働省 2022)である。このことを目的として介護保険制度においても創設当初より、要支援の認定を受ける者を対象とした予防給付を設定している。そこでは運動器機能向上、栄養改善、口腔機能向上のプログラムに対し、介護報酬上の加算による評価をおこなっている。

しかし介護予防は単に心身機能の改善を目指すのではなく、日常生活の活動性を高め、家庭や社会への参加を促し生きがいや自己実現を支援することも視野に入れる必要がある。そこで厚生労働省は「地域がいきいき集まろう！ 通いの場」というウェブサイト(厚生労働省 2020)を立ち上げ、全国の自治体でおこなわれている通いの場での取り組みを紹介している。

このように地域において誰もが気軽に立ち

寄り、交流することのできる通いの場の重要性が認識されつつある。しかし、こうしたサロンや介護予防教室などの通いの場への男性の利用がすすまない。多くの通いの場では、その利用者は大半が女性である。男性の場合、社会とのつながりが希薄で、社会活動への参加に乏しい者も多い。

地域からの孤立は、孤独を生み健康状態の悪化や自殺や孤独死(孤立死)を招きやすいと考えられている。高齢男性の社会関係の改善を通じた見守り支援はその後、介護支援が必要となったときのスムーズなサービス利用にもつながる。比較的元気な段階での高齢男性への支援は重要である。

このような背景から、高齢男性に対し早期の支援を通じて地域の中でのつながりを維持、回復する支援が必要であると考えた。それは高齢男性本人へのアプローチだけでなく、生活環境の調整、生きがいや居場所づくりなど、バランスの取れた支援をおこなうことを指す。そのような社会関係の再構築をすすめるためには、本人の持つ力を引き出し主体的に日々の生活を送ることにつながる支援、すなわちエンパワメント支援としておこなう必要がある。

そこで本稿は高齢男性へのエンパワメント

支援として、介護予防デイサービスと呼ばれるデイサービス事業所の利用を通じた事例検討を実施した。そこは利用者全員が要支援と認定されている介護予防に特化した事業所であり、高齢男性にとって①居場所の提供、②孤独感の低減、③スタッフによる見守りと変化への迅速な対応を可能にする。その介護予防デイサービスを利用する高齢男性の事例から、高齢男性はどのように地域とのつながりを維持しながら要支援の状態を維持し、地域生活を継続しているのか、その支援方法に迫りたいと考えた。

Ⅱ 高齢男性の生活問題の所在

1. 高齢期における生活状況の変化

日本の高齢化率は2023年4月現在で29.1%（総務省 2023）と依然として上昇し続けている。また世帯構造を見ると三世帯同居は減少し、「単独世帯」「夫婦のみ世帯」が全体の過半数を占めている（厚生労働省 2022）。なかでも65歳以上の一人暮らし高齢者の増加は、地域とのつながりや家族内での関係を希薄にすると考えられる。

このように社会が変化するなかで高齢男性の生活問題を検討するにあたり、定年退職による生活状況の変化への不適応は見逃すことのできない問題である。長年にわたり会社員生活を送ってきた高齢男性は、定年退職とともに職場との人間関係が途絶える。そして新たな生活の中心となる居住地域のなかで居場所を見つけることに苦勞する高齢男性が多いのである。このことについて楠木新は、著書の中で定年退職した男性へのインタビューを試み、そのコメントを以下のように紹介している。

「定年になって初めの1か月程度は解放感に満たされたが、それ以降はやることなく本当に辛かった。家に引きこもりがちになって半年もするとテレビの前から立ち上がれなくなった」（楠木 2017:34）

「会社員は自分で工夫しなくても、会社が自然とオンとオフのスイッチを切り替えてくれる」（楠木 2017:38）

これらのコメントは定年退職によって高齢男性の生活が、それまでと一変していることを示唆している。そして地域や家庭での人間関係の構築に苦勞することになるのである。

定年による生活状況の変化に加え、会社勤めをしていた男性の多くは長距離通勤を伴う長時間労働に励み、もともと地域社会との関係が希薄であることが指摘されている（田高・河野 2017:387）。地域とのつながりの希薄は、そのまま孤立につながりかねない。その結果、高齢男性は身の周りのことに支援が必要になったとき、家族にしか頼れなくなるのである。

2. 潜在化する高齢男性の生活問題

地域とのつながりの希薄な高齢男性には、常に孤立のリスクがつきまとう。一般的に高齢男性は女性と比較して孤立に陥りやすい（小谷 2017:378）といわれている。そして「男性、独居、高齢は高齢者の社会的孤立の三大リスク要因である」（田高・河野 2017:384）とも指摘されている。そして孤立の結果としてもたらされる孤独は、健康に悪影響を与えるということは多くの先行研究から指摘されている。そのリスクの高さは肥満や大気汚染、環境ホルモンや食品添加物やアルコールより

も高いといわれている(岡本 2018:10)。また高齢男性の孤立、孤独は孤独死(孤立死)や自殺の問題にもつながる。東京都監察医務院の統計(東京都監察医務院 2023)をみると、高齢者の孤独死、自殺とも女性より約1.8倍男性のほうが多い。

また一人暮らしの高齢男性の場合、セルフケアに問題を抱えている場合も多い。自律的に行動している状態に乱れが生じると、適切な食生活や健康状態悪化時の対応などの面で、不具合が起きる。しかし高齢男性の多くは、自らのこうした課題に対して必ずしも不便や苦勞を感じていない。そこには支援者側と高齢者側の生活状況に対する認識の差があるといわれている(河野ら 2009:662-673)。

このように孤独そのものが健康への悪影響をもたらすことが指摘されている。にもかかわらず高齢男性は福祉・介護サービスにつながりにくい。この背景として彼らの自尊心や男性性への配慮も必要となる。この点についてジェンダーの視点から「男たちは、ほとんど無自覚に、自分の〈男らしさ〉についての固定的な鎧に包まれている」という指摘もある(伊藤 1996:89)。また社会活動を通じた他者へのサポートに参加することなく、むしろサポート受け続けた場合、要介護状態の発生日リスクが高まるといって指摘があり、とくに男性に多い傾向であるとされている(吉井ら 2005:456-467)。その理由として、社会規範の影響をあげ「男性は自立的・独立的であることを強調する文化があるため、多くのサポート受けることは自己効力感に対する脅威と感じやすい」(Teresaら 1996)という指摘もある。

これらは「我慢をすること」や「他人に頼らないこと」が男らしさの象徴であるという男

性の意識を表している。このような点も高齢男性が介護・福祉サービスにつながりにくい背景のひとつとして考慮する必要があるだろう。

Ⅲ 高齢男性のエンパワメントを支援する枠組み

1. 高齢男性への早期の支援の必要性

自分に介護が必要になったとき、どこで、誰に介護してもらいたいかという調査は、近年多く実施されている。その特徴として、高齢者は男女を問わず自宅で介護を受けることを望んでいる。そして介護者について、多くの男性は配偶者に介護をしてもらいたいと思っている。一方女性は、子どもやホームヘルパー、施設サービスなど、多様な人材による介護を望んでいる。こうした調査からも、高齢男性は家族への依存度の高いことが理解できる(田岡・村岡 2001:27-60)。定年退職後の新たな人間関係構築の困難や、家族への依存といった背景から高齢男性は孤立に陥りやすいと考えられる。それは介護・福祉サービスへのつながりにくさにも表れている。

こうした高齢男性支援の課題に対して、介護予防の視点つまり早期の段階での積極的な支援をおこなうことが求められる。高齢男性と介護予防を、人と社会とのつながりという視点から検討した先行研究はそれほど多くない。たとえば岡本秀明は、高齢者の社会活動と生活満足度の関連を男女別に検討している(岡本 2014:11-26)。そこでは社会参加や奉仕活動への参加と生活満足度について、高齢女性には正の関連があったものの高齢男性には認められなかったと指摘している。また大久保豪らによる高齢男性の介護予防事業への

参加状況に関する調査では、茶話やふれあいといった内容の事業には、男性の参加が有意に低いことを明らかにしている(大久保ら 2005:1050-1057)。このように高齢男性は地域とのつながりが希薄で、自らすすんで社会活動へ参加することが難しいのである。

社会活動への参加の低調な高齢男性の孤立を防ぎ、支援が必要となったときにいち早くサービスにつなげることを可能にするために、家族以外の支援者の早期からの関わりが必要なのである。その支援とは本人の行動を引き出すような支援のことであり、そこで本研究はエンパワメントという概念に注目したのである。

2. 介護予防として的高齢男性のエンパワメント支援の枠組み

エンパワメントとは「個人が自己の生活をコントロール・決定する能力を開発するプロセス」(野嶋 1996:453-464)といわれ、近年では福祉、医療、教育、経営、社会開発などの幅広い分野で取り上げられている。その起源は、アメリカにおけるアフリカ系アメリカ人による差別撤廃運動に関わったソーシャルワーク実践といわれている(西梅 2004)。またWHOのオタワ憲章でも、ヘルスプロモーションを推進する要素として「個人のエンパワメント」と「コミュニティのエンパワメント」という概念を提示している。

家族以外の支援を受け入れることに困難を抱える高齢男性に対し、このエンパワメントの視点からサービス活用能力の獲得を促す必要があると考えたのである。筆者はこれまでの調査(山本 2021:35-54)から、高齢男性のサービス利用に至る要因として「仲介者」としての第三者の存在を明らかにした。つまり

他者からの仲介をきっかけとして福祉サービスとつながり、居場所の獲得や本人を中心としたネットワーク構築が可能となるのである。

このようにエンパワメントを志向した高齢男性支援の構成要素として、①本人の納得するサービス利用の理由、②本人の興味関心にもとづくプログラム、③本人のペースを尊重する利用スケジュールの3点を仮説として提示したい。まず①について、福祉サービスの利用に抵抗のある高齢男性には、利用開始するにあたって「大義名分」が必要なのである。また②では、高齢男性の社会活動参加は、本人の興味関心のあるプログラムでないとするまないとこの先行研究をふまえている。そして③では利用したいときに利用できるサービスであることが長期の利用につながると考えたのである。本研究では、このような枠組みのもと高齢男性のエンパワメント支援の実際を調査し、その意義と課題を確認していきたい。

IV

介護予防デイサービスで行われる 高齢男性のエンパワメント支援の実際

1. 研究方法ならびに分析方法

地域とのつながりの希薄な高齢男性へのエンパワメント支援の方法を検討するため、本研究は事例研究の手法を用いて検討した。事例研究とは「その事例のもつ固有の意味を探索し、最終的に新たな理論を導くこと」を目的とする(グッレグ 2016:149)。そしてその分析は、事例に関わった筆者とサービス提供事業所の職員による検討を通じておこなった。具体的には、事例における本人や職員の発言、あるいはその後の検討のなかでの発言

から、高齢男性のエンパワメント支援に必要と思われる関わりや本人の変化を記述し、コード作成をおこなった。そのコードから支援の方法につながるサブカテゴリ、カテゴリを生成した。そのような作業を通じて事例におけるエンパワメント支援のポイントを整理していった。そのために、ある介護予防デイサービス事業所を利用するひとりの高齢男性(76歳 要支援2)の事例を用いた。なお、本事例にもとづく調査研究の実施期間は、2018年12月から2022年4月までである。その根拠は調査対象の高齢男性が、要支援の状態を維持している期間とした。

この事例を採用した理由は次の2点からである。まず1点目として、事例のHさんは高齢男性としては比較的若年であり、身体介護は必要としなかったこと。そして2点目は退職をきっかけとした自宅中心の生活のなかで、アルコールの問題や家族間の関係悪化など、身体介護以外の生活面や社会面での支援を必要としていることである。こうした背景から本研究におけるエンパワメント支援による状況の改善を試みたいと考えたのである。

2. 倫理的配慮

事例となる対象者には、本研究の実施にあたり研究目的を説明し、事例として使用することの承諾を得た。また本研究は研究実施者(筆者)の所属する社会福祉法人の個人情報取り扱いガイドラインを遵守して実施している。

3. 事例の概要

Hさん(76歳)

大学卒業後、母校の大学事務員に就職し、定年を越えて70歳まで勤め上げ退職する。

妻と二人暮らし。もともと酒が好きだったHさんは退職後、自宅で日中から飲酒を重ね昼夜逆転の生活となっていた。その様子を心配した看護師でもある長女は、地域包括支援センターに相談し介護保険の申請をした。その結果、要支援2の認定を受けたHさんは、自宅を出てアルコールから離れる時間をもつことを目的として、通所サービスの利用を検討した。Hさんの利用することになった通所サービスは、介護予防デイサービスA事業所である。そこは要支援の認定を受ける軽度者のみが利用する、定員10名の小規模デイサービスである。Hさんは長女や担当のケアマネジャーからのA事業所の利用の勧めに、当初は乗り気ではなかった。しかし話し合いの末「娘の顔を立ててな」としぶしぶ利用を了承するのであった。

4. 事例においておこなわれた具体的な支援内容

ここでHさんの介護予防デイサービスにおける支援内容を確認しよう。以下(表1)は実際に作成された個別支援計画の抜粋である。

表1 Hさんの介護予防デイサービスでの個別支援計画(抜粋)

①目標	自宅を出てアルコールから離れる
②利用時間	13:30~16:00
③利用曜日	月曜日 木曜日
④プログラム	ベッド休養、職員とギターのセッションを楽しむ

Hさんは昼夜逆転の生活となっていたため、朝から起きて出かける支度をするのが難しい。そこで午前、午後の2部制で運営しているA事業所が選定されたのである。またHさんに利用に興味を持ってもらうため、学

生時代に取り組んでいたギターの趣味を活用した。これには本人も当初から乗り気で「何十年ぶりやろうなあ、昔はエレキでよくやったんよ」と楽しみな様子であった。A事業所にはピアノ演奏の得意な職員がおり、その職員とのセッションを楽しむようになった。

2年ほどA事業所の利用を継続していたHさんであったが、あるときからサービスの利用を休みがちになった。その後本人の意向により、週2回の利用を1回に変更したのである。このときのHさんは飲酒の量が以前より増え、A事業所の送迎の職員もわかるほど酒の臭いをさせながら送迎車に乗り込むのであった。またギターのプログラムも始めて10分ほどで終了することが度々あった。

このようなHさんの状況に、A事業所の管理者兼生活相談員であるK氏(63歳、介護福祉士)は、Hさんとの対話、あるいは関係者との連携を通じて状況の改善を試みた。その主な内容は以下のようなものである。

- ①このままではデイサービスの利用ができなくなることを本人に伝える。
- ②飲酒量を減らすこと、とくに日中はノンアルコール飲料にすることを提案する。
- ③ケアマネジャーと密に連携し、自宅やデイサービスでの様子を互いに情報共有する。
- ④家族(ここでは同居の妻)にも連絡をとり、見守りなどの協力を依頼する。

このような支援を通じて、Hさんの利用状況は少しずつ改善した。週1回となった利用回数が再び2回となった。また飲酒についてはなくなることはなかったが、少し量を減らすことに取り組んでいるという。こうした状況から、その後も利用継続することを可能とした。

そしてA事業所を利用するHさんに変化が

訪れたのである。利用開始当初、ギターのセッションをする特定の職員だけの人間関係であったのが、他の利用者と会話や体操、楽器の演奏を楽しむようになったのである。こうしてHさんは約4年間にわたりA事業所の利用を継続することができたのである。最終的にHさんは、要介護認定の更新で要支援2から要介護1となり、介護予防デイサービスを利用終了し、他のデイサービスへ利用先を変更することになった。その際もスムーズに移行することができたのである。

5. 事例からの分析結果

事例を通じて、K氏と筆者との検討からHさんへの支援について分析を試みた。ここではA事業所の保有する支援経過記録をもとにしたK氏と筆者の検討から26のコードと8のサブカテゴリーを抽出した。そこからHさんへのエンパワメント支援のポイントとして表2のように3つのカテゴリーを生成した。

V | 高齢男性のエンパワメント支援の意義と課題

1. 調査結果にみる高齢男性へのエンパワメント支援の効果

このように長期間にわたって要支援の状態を維持したHさんの事例から、早期の段階での支援、つまり介護予防効果を生み出すエンパワメント支援の方法について検討したい。ここではまず表2のように生成された3つのカテゴリー、①モチベーションを維持する支援、②自宅での生活を見据えた支援、③交流を展開する支援についてひとつずつ検討する。なお本文中の斜体字は支援者である職員の発言の要約である。

表2 事例にみるHさんへのエンパワメント支援の分析結果

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
モチベーションを維持する支援	自宅での生活リズムの尊重	夜中2時ごろに就寝する 午後から活動する
	趣味を活かす	じっとしているタイプでない 夕方に1時間散歩する 釣りが好き 畑仕事は運動になる
	危機感を伝える	前日の酒が残っている 週2回の利用が1回になった ギターを10分ほどでやめる 職員から厳しい指摘を受ける
自宅での生活を 見据えた支援	家族との関係の支援	家族との関係が悪い 外出の機会を持つことを促される 妻はデイのプログラムに不満 別荘にはいかない、家族だけ 嫁さんを拘束したくない (自分がデイに行くことで) 嫁さんを自由にしてやりたい
	食生活へのアドバイス	酒を控える 昼はノンアルにしている (飲酒量の減少を) ほめられる
	ケアマネジャーとの連携	待つ、様子を見る (支援を受け) 利用を週2回に戻した
交流を展開する支援	関心のなかったプログラムへの参加	体操をするようになった (デイで) 起きている時間が増えた 「体操に合う曲」のリクエスト
	女性利用者との交流	〇〇さん(他の利用者)との出会い 働く女性の存在

まず①について、A事業所では利用時間や過ごし方を、本人の意向に沿って柔軟に設定することを心がけていた。それは本人の意思や意向を尊重するためであり、結果的にそのような対応を通じて、HさんはA事業所の利用を気に入っていたのである。その一方でK氏は「ギターをしても10分ほどでやめてしまう」や「週2回の利用が1回になった」というHさんの消極的な姿勢に対し、「今のままではここを利用できなくなる」という危機感をはっきり本人に伝えている。このようなコミュニケーションを行うために、K氏は日ごろからHさんとの信頼関係の構築を心掛けていたのである。そしてHさんの「釣りが好き」「畑仕事は運動になる」などの発言から、A

事業所の職員たちはギター以外のプログラムの提供を検討したのである。そこで職員はHさんに敷地内の花壇の整備全般をお願いし、Hさんも意欲的に取り組んだのである。このとき職員はHさんに対し、単に水やりや草引きを依頼するだけでなく、どうすれば植物をうまく育成できるのかHさんにたずねていた。そのようなやりとりを通じて、Hさんはサービス利用継続につながったと考えたのである。

また調査期間中には、新型コロナウイルス感染症の感染拡大もあった。Hさんは幸い期間中、新型コロナに感染することもなく、サービス利用を継続していた。それは感染拡大を危惧し利用を休むことのないようK氏をはじめ

めとするA事業所の職員による、対面あるいは電話による日頃からの言葉掛けの効果であると考えた。

また②について、K氏は「酒を控えるよう提案した」、「日中はノンアルにしている」のように、自宅での過ごし方についてHさんと話し合いを重ねアドバイスしている。またHさんは家族、特に妻との関係が良くなく行動をともにすることはほとんどない。職員はHさんの在宅生活を支援する上で、少しでもこの関係を改善したいと考えていた。特に「家族はHさんの自由に過ごさせるプログラムに若干不満に思っている」という発言に対しては、デイサービスの職員がケアマネジャーと密に連絡を取り合い、ときにはケアマネジャーが間を取り持ちながら家族の理解を得て、本人の利用継続につなげた。

そして③は、利用開始当初、ギター演奏を利用の目的としていたHさんは、ピアノが得意な「特定の職員とのセッションを楽しむ」んでいた。それがやがて他の利用者の行う「体操のための伴奏」や、他の楽器を使う利用者とのセッションを行うようになっていった。またHさんは利用中を通じて女性利用者との会話が増えていった。その会話から彼女たちの様々な生き様、特に「働く女性の存在」に関心を持ち、またHさんは自身のことも打ち明けるようになったのである。つまり臥床とギターのみだったHさんのプログラムは、他の利用者との交流を伴うものに変化した。そしてこのことを通じてもともとHさんが持っていた社会的な面が引き出されたと考えたのである。

このようにしてHさんは、週1回に減らした利用回数を再び週2回に戻したのである。一方で事例からは、A事業所内での職員や他

の利用者との豊かな人間関係を確認することはできたものの、地域との関係の構築に関して大きな変化は見られず、外出の頻度が以前より増えたことの確認にとどまっている。この点については今後経過をみていく必要がある。

これら一連のHさんへの支援に共通する点として、K氏をはじめとするA事業所のスタッフは、Hさんに対する直接の支援(送迎、音楽、相談など)だけでなく周囲の人間関係にも働きかけ、それが有効に機能していたことである。自宅での生活に対する支援をおこなうために、家族やケアマネジャーと繰り返し連絡を取り合い、その上で本人へのアドバイスをおこなっていた。そしてA事業所でのプログラムも特定の職員だけでなく、他の利用者と交流するためにK氏は他の職員や利用者と間に入り、Hさんがその輪に加わりやすい雰囲気づくりに腐心していたのである。

これらの支援を概念図として表したものが図1である。ここではK氏を中心とした介護予防デイサービスA事業所の職員は、自ら直接にHさんに対しサービス提供をおこないながら、家族、そしてケアマネジャーや近隣住民などの地域に対して、積極的にかわりHさんと結びつけるよう試みているのである。そしてA事業所の利用を通じて、Aさんは閉じこもりをはじめとした自身の生活問題を意識し、自ら改善に向かおうと努めるようになったのである。この点は、「通所介護が高齢者の日常生活の不活発さを解消してくれる意味のある活動になる」という先行研究の知見と一致する。

そして支援の結果として、「飲酒量の減少」「屋外活動の増加」「サービス利用の継続」「在宅生活の継続」をもたらしたと考えた。なか

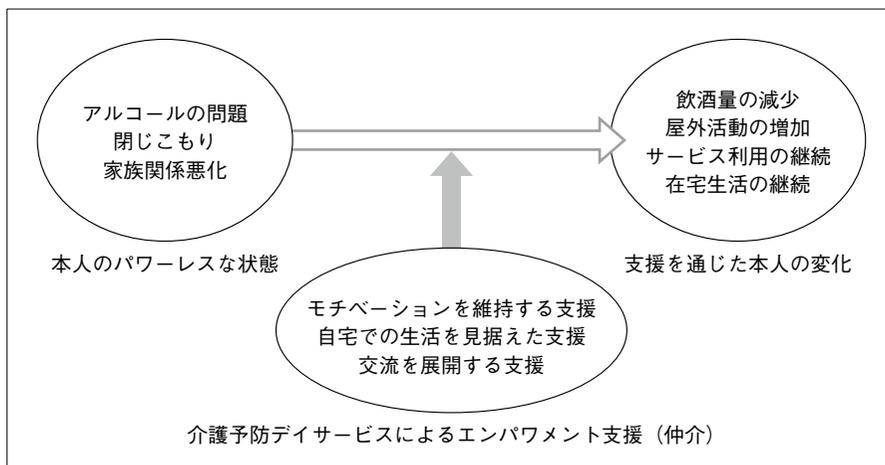


図1 エンパワメント支援による本人の変化

でもサービス利用を継続することは、その後の本人ならびに周囲の状況の変化にいち早く気づくことを可能とし、必要な支援をその都度提供し、または紹介することにつながる。そのことは結果として在宅生活継続の可能性を高めることにもつながる。つまり交流を展開する支援とは、現在の人間関係の拡大にとどまらず、今後の見守りや支援も含むものと考えたのである。また本研究では、悪化した家族との関係に明確な変化はみられなかったものの、結果としてこれまでどおりの在宅生活を維持していると考えられることもできる。

このようにみるとA事業所のスタッフによるHさんへの支援は、「仲介」の役割を果たすことで成り立っていたということが出来る。この仲介は、ソーシャルワークの機能のひとつとしてあげられているものである(黒木・山辺・倉石 2002:25)。それは一般的には本人と社会資源を結びつけることを指す。しかしそれだけでなく、ここにはサービス利用を通じて多様な人間関係への働きかけを継続的におこなうというより広い意味での仲介が存在し、そこに高齢男性へのエンパワメント支

援の可能性があると考えた。

2. 高齢男性エンパワメントモデル構築に向けての課題

この事例から、Hさんはエンパワメントを志向した支援を受けることにより、サービス利用の継続だけでなく、生活全体に対して前向きにとらえることができるようになったことが理解できる。Hさん自身が生活課題を受け止め、それに向き合い解決する力を得ることを可能としたのである。このように高齢男性の場合、仕事以外の生活面について妻をはじめとする家族に依存しがちである。Hさんの事例を通じて、高齢男性に対する早期の支援によるエンパワメントは有効であることが明らかになった。

最後に今後の課題を整理したい。それは①事例の少なさ、②通所サービスでしか実現できないのか、③地域性の考慮の3点である。まず①では、今回Hさんひとりの事例に焦点をあて検討した。これだけでは支援の効果の再現可能性という点で説得力に乏しい。高齢男性のエンパワメント支援の仮説探索として

の意義は大きいですが、支援モデルの構築つまり一般化への課題が残されていると考えた。

そして②について、Hさんの事例では自宅を出る、という大きな目的があったため支援の舞台は介護予防デイサービスという通所サービス事業所が選ばれた。しかし地域における支援の場面はさらに多様である。訪問型サービスや地域におけるインフォーマルな支援の活用など通所サービス以外の支援方法の検討も必要となる。

最後に③について、都市部と地方では生活環境も大きく異なり、支援に対する視点も変わらざるをえないだろう。また現在の高齢男性の多くは仕事一筋に生きてきたことを考慮すると、会社員であったか農業漁業などの1次産業従事者であったかなど、職歴に左右される可能性は高い。より多くの高齢男性に対応できる支援モデル構築のためには、ここに示したような多様な事例をサンプリングして検討する必要がある。

VI | おわりに

本研究に取り組むにあたり、高齢男性の機能低下のきっかけは、退職に伴う人間関係の希薄にあるのではないかと考えたことが出発点であった。事例に登場したHさんのように現役時代、それこそ定年を超えて働き続けても、退職と同時に生活状況が一変することで心身の機能低下は起こり得るのである。

近年、健康ブームの影響もあり、地域のスポーツクラブでは男女問わずシニア世代が活動している姿が目立つ。そこには利用者同士、または利用者とスタッフとの人間関係がある。しかし運動の苦手な人や関心のない人は、そのような集団に参加することはない。そうした人々が高齢となったとき、やはり地域の

なかで見守られる必要が出てくる。そのときの支援の方法に男女で違いがあるのかもしれない。女性の場合はコミュニケーションの得意不得意はあれ、集団のなかでそれなりに人間関係を築くことが容易である。その一方で男性は単にサービスにつなげるだけでは孤立した状況は変わらず、そこに職員の支援が必要となるのである。本研究ではいくつかの課題も明らかになった。高齢男性が豊かな人間関係のなかで、主体的な生活を送ることができるよう支援方法を確立するために今後も研究を継続したい。

◎ 参考文献

- 伊藤公雄, 1996,『男性学入門』作品社:89
- 大久保豪・斎藤民・李賢情・吉江悟・和久井君江・甲斐一郎, 2018,「介護予防事業への男性参加に関連する事業要因の予備的検討 介護予防事業事例の検討から」『日本公衆衛生雑誌 第52巻 第12号』日本公衆衛生学会:1050-1057
- 岡本純子, 2018,『世界一孤独な日本のオジサン』KADOKAWA:10
- 岡本秀明, 2014,「地域における高齢者のインフォーマルな社会的ネットワーク形成に関連する要因—友人・知人の獲得に着目して—」『社会福祉学 第55巻 第2号』日本社会福祉学会:11-26
- 河野あゆみ・田高悦子・岡本双美子・国井由生子・山本則子, 2009,「大都市に住む一人暮らし男性高齢者のセルフケアを確立するための課題 高層住宅地域と近郊農村地域間の質的分析」『日本公衆衛生雑誌 第56巻 第9号』日本公衆衛生学会:662-673
- 楠木新, 2017,『定年後』中央公論新社
- 黒木保博・山辺朗子・倉石哲也『福祉キーワードシリーズ ソーシャルワーク』中央法規:25
- 小谷みどり, 2017,「孤立する男性独居高齢者の現状」『保健師ジャーナル Vol.73 No.5』医学書院:378-383
- 堀口康太,大川一郎「高齢者の通所介護利用動機づけと生きがい感の関連—自律的—統制的動機づけの枠組みから—」『高齢者のケアと行動科学 2020 第25巻』,日本老年行動科学会:pp.67-83
- 厚生労働省, 2020,「地域がいきいき 集まろう! 通いの場」,厚生労働省ホームページ(2023年7月6日取得 <https://kayoinoba.mhlw.go.jp>)
- 厚生労働省, 2022,「介護予防マニュアル 第4版」,厚生労働省ホームページ(2023年9月30日取得 https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_25277.html)
- 厚生労働省, 2022,「国民生活基礎調査」,厚生労働省ホームページ(2023年9月29日取得 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa22/index.html>)
- 総務省統計局,2023,「人口推計」,総務省ホームページ(2023年9月30日取得 <https://www.stat.go.jp/data/jinsui/pdf/202309.pdf>)
- 田岡洋子・村岡洋子, 2001,「アンケート『高齢者にお話を聴く』から得た現代の高齢者像」『京都短期大学論集 29巻1号』京都経済短期大学:27-60
- Teresa E.Seeman, Martha L.Bruce, and Gail J.McAvay, 1996, Social Network Characteristics and Onset of ADL Disability:MacArthur Studies of Successful Aging Journal of Gerontology: SOCIAL SCIENCES Vol. 51B, No.4 :191-200
- 田高悦子・河野あゆみ, 2017,「高齢者の社会的孤立における性差とアプローチ」『保健師ジャーナル Vol.73 No.5』医学書院:384-388
- 東京都監察医務院, 2023,「統計データベース」,東京都監察医務院ホームページ(2023年7月6日取得 <https://www.hokeniryu.metro.tokyo.lg.jp/kansatsu/index.html>)
- 西梅幸治, 2004,「ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践展開研究の意義」『福祉社会研究 第4・5号』京都府立大学:53-67
- 野嶋佐由美,1996,「エンパワメントに関する研究の動向と課題」『看護研究 29巻6号』医学書院:453-464
- 山本大輔・中村佐織, 2021,「介護予防デイサービス固有の役割の検討—高齢男性の地域生活継続の視点から—」『京都府立大学学術報告 公共政策 第13号』京都府立大学:35-54
- 吉井清子・近藤克則・久世淳子・樋口京子, 2005,「地域在住高齢者の社会関係の特徴とその後2年間の要介護状態発生との関連性」『日本公衆衛生雑誌 第52巻 第6号』日本公衆衛生学会:456-467